



令和2年7月16日

# 根本正顕彰会会報 第94号

発行者 根本正顕彰会

「踏まれても根強く忍べ路芝のやがて花咲く春をこそ待て」

## 目次

1	巻頭言「ごあいさつ」	会長 増子輝雄	1頁
2	コロナ自粛	副会長 山田正巳	2頁
3	100年前のスペイン風邪	副会長 横地富子	3頁
4	日米・日中友好と文化交流に生涯を捧げた一人の女性	副会長 根本正治	7頁
5	佐竹北家	理事 海老根敬	8頁
6	「大相撲の奥深さ伝わった春場所」に関して	理事 小堀 優	10頁
7	この一年を振り返って	理事 勝山 昇	12頁
8	疫病退散の祈り	事務局長 仲田昭一	13頁
	編集後記	副会長 根本正治	16頁

## 【お知らせ】

「根本正ゆかりの地を訪ねる旅」9月27日(日) は中止です。

「根本正顕彰フェスティバル」は11月21日(土)開催で調整中です。

# ご あ い さ つ

根本 正顕彰会

会 長 増 子 輝 雄

昨年5月から元号も変わり、顕彰会も新しい役員のもと早いもので1年が経過しました。

会員の皆様方には日頃より顕彰会活動にご支援、ご協力をいただき心より厚くお礼申し上げます。

特に昨年は那珂市内の小学校、中学校の社会科教育研究部会の先生方に、夏季研修として夏休み期間中「根本 正の生き方に学ぶ」と題して研修会が開催されました。顕彰会役員も参加し協力させていただきました。これを機会に今後の学校教育の中でも取り入れていただき、多くの方に学んでいただければと期待しているところであります。

さて、令和元年度の顕彰会活動も順調に推移してきたところでありましたが、今年に入りこのたびの「新型コロナウイルス」感染症が世界に拡大し大変なことになってしまいました。これらの影響から令和2年度の事業運営については、拡大防止の観点から先にご協力いただいた総会の措置をはじめ、一部事業の中止等を執らざるを得ない状況になっているところであります。会員の皆様のご理解とご協力をいただきますようよろしくお願いいたします。

世界に流行した感染例としては、今から約100年前「スペイン風邪（スペイン・インフルエンザ）」が1918年（大正7年・根本 正が衆議院議員在職中）後半から1920年の前半頃までの約3年間の期間に大流行した例が記録され、その状況や対応は今日の「新型コロナウイルス」に通じるところがあるともいわれております。

いづれにしても「新型コロナウイルス」は現在も世界に拡大しており多くの感染者、そして死者がでております。我が国においては政府の「緊急事態宣言」による対策、そして外出自粛など国民一人一人の努力等もありやや沈静化に向かっているものの、特効薬やワクチンの開発状況等の関係から、第二波、第三波の到来も心配されているところであります。一刻も早い社会・経済活動の回復が強く望まれます。

私ども顕彰会としましては、落ち着いた社会生活の中でいままでどおりの調査研究などを進めるとともに、皆さんにお伝えできる環境づくりに努力して参りたいと考えております。引き続き会員各位のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

## コロナ自粛

新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより顕彰会の新年度の行事も自粛せざるを得ない状態です。早期の終息を願っておりますが、アメリカ大陸やアフリカ大陸での感染拡大を見るにつれ、何時になったら元の日常に戻れるか先が見えない状況です。

また、一年先送りされたオリンピック・パラリンピックの開催も危惧されるところでもあります。政府は、これらに対応し3月14日には改正インフルエンザ等対策特別措置法に基づき政府対策本部を設置、3月20日には、イベントの開催に関する国民の皆さまへのメッセージ【この1、2週間が感染拡大防止に極めて重要であることを踏まえ、多数の方が集まるような全国的なスポーツ、文化イベント等については、大規模な感染リスクがあることを勘案し、今後2週間は、中止、延期又は規模縮小等の対応を要請することといたします。】

これらを踏まえ、地元的那珂市におきましても感染防止のため、ソーシャルディスタンス(社会的距離)に基づき集会所の貸し出し中止や制限が現在まで続いている状況です。そのような訳で今回の会報は、理事の有志が事業報告代わりとして近況報告や随筆等をお送りしますので、ご笑覧ください。

この間小生は、最小限の食料品の買出し以外は家から出ずに引きこもり状態で過ごしてまいりましたが、幸いにして一人で遊べる趣味(陶芸)と家庭菜園にじっくり取り組めることが出来、自分で納得できる作品やみずみずしい野菜の出来映えに満悦しております。自分にとっては「コロナ禍」でなく「禍福は糾(あざな)える縄の如し」の心境です。ヒトとウイルスは旧約聖書の中にも書かれており、「麻疹(はしか)の人を見つけたら祭司のところへ連れて行き、施設に留め置きなさい」イスラム教のマホメットの言葉にもある国に疫病が存在していると知ったならばそこへ行ってはならぬ。もし疫病が汝らの今のいる国に発生したならば、そこを離れてはならぬ。医療の発達していなかった当時、隔離や自粛が最大の感染防止策であることを知っていたのでしょうか。島国日本では江戸時代にコレラが大流行したことがありましたが、開国を要求して来航したペリーの艦隊が持ち込んできたと言われております。紀元前3000年にメソポタミア文明で繁栄したシュメール地方で麻疹が流行したことが記されており、日本で初めて麻疹のことが記載されたのが平安時代ですので、実に4000年掛かって東の果ての島国まで伝染したようです。

この度の新型コロナウイルスは、中国武漢で発生し、瞬く間に全世界に広がり、国によりその対応のスタンスは異なりますが、隔離や自粛のお願い等、紀元前に行われていた、移動の制限による封じ込め策等の措置は全く変わっておりません。変わったのはその伝染するスピードであり、これらはグローバリゼーションと関係していると思います。従来の国家・地域の垣根を越え、地球規模で資本や情報のやり取りが行われ観光立国を目指す日本には多くの外国人が入国し、また中国では、サプライチェーンとして世界の工場が集中し、コロナ禍においてはマスク不足等が問題となりました。これからも人類とウイルスとの戦いは続くものであり、人類以外の動物は長く共存して今日まで至っております。

それには、われわれ人類もウイルスとはもちろん、地球に存在する全ての物(者)と共存の道を進まなければならないと考えているコロナ自粛のこの頃です。

令和2年7月1日  
根本正顕彰会副会長  
山田 正巳

## 100年前のスペイン風邪

横地富子

大正8年、根本正が未成年者飲酒禁止法案(大正11年に成立した)を提出し続け国会で審議しているころ、世界中で、日本でスペイン風邪が流行していました。

100年後の現在、新型コロナウイルス感染が世界中で流行しまだ終息の見込みが立たない今日、大正8年の第41回帝国議会議に於て山根正治が世界感冒(スペイン風邪)の実状と対策を政府に緊急質問をした衆議院帝国議会議録を見つけました。

現在の状況や政府の対策と比較しながらご一読ください。

### 大正8.2.21 第41回議会議 世界感冒に関する緊急質問

長州出身  
医学者



山根正治：

諸君、世界感冒と申しまするか、或は流行性感冒と申しまするか、或は流行性肺炎と謂うか此病気が流行りまして、大変に人命を損するのであります、之に対して当局の予防方法を何等聞かぬのであります、もう出るかもう出るかと思つて居つたがいつかな出ない、然るに学校は閉じられ、火葬場は屍体を以て満されて焼くことが出来ないと言ふような有様、此病気は如何なる程度、如何なる数にまで達して居るか、其事が知りたいのであります、是まで27・8年の役(日清戦争)の頃に於ては、臨時検疫部を設けて、其処で是等(コレラ)の予防したと云うことがあります、然るにそう云うことが一つも無いのはどうであるか、学者が彼方此方に於て、是が予防法をやつて居るけれども、皆違つて居るようである、之を一定して内務省に学者を集めて、即ち是が予防方法を講ぜられる御考は無いのであるか、どうしてもそう云う方法を講ぜられなければ何ぼでも人が死んでしまう、実に悲惨なことである、それありますから、十二分に此事をやつて貰いたいのであります、けれども内務省は之に対して何もやつて居らぬようであるから、之を御尋ねするのであります、そうして予防方法を立てられたらどうであるかと云うことを御尋ねたいと云う積りで、今日此処に登つたのであります、どうか御返答を願ひます(拍手起る)

政府委員 杉山四五郎

唯今山根君より、目下非常な猖獗<sup>しょうけつ</sup>の勢い(猛威をふるう)を以て流行致しつつあります、所謂流行性感冒の流行の実況は如何と云う御質問、次で之に対する政府の予防措置如何と云う、この二点の御質問と存じます、御答申し上げます、唯今山根君の御述の如くに、所謂此病気は殆ど全世界を風靡<sup>ふうび</sup>致しまして、我国にも昨年<sup>しゅうねん</sup>の春頃からぼつぼつ発生を見まして、10月の中旬頃から非常な勢を以て伝染を致して居ります、而して其数は各地方画一的の報告が参つて居りませぬから、極く正確には申上げられませぬけれども、昨年10月15日以降本年1月31日に至りますまでの、3府24県の実数を申しますると云うと、患者数が9,138,376名、中死亡者68,018(人)比例を申しますると1,000人に付7人2分と云うような数を示して居ります、尚ほ之を手近な東京市に就て見ますると、大正7年10月20日より大正8年1月31日に至ります、約100日間に於ける感冒の為の死者が5,077人、此同一期間に於きます所の総死亡者数が18,045人、即ち死亡100に対します感冒死者の数の割合が、28.14「パーセント」であります、

人口に致しますると、1,000に対する死亡者が2人16分であります、尚ほ之を男女別にして、東京市内の状況を見ますと、23歳から33歳に至ります間は、婦人の死亡率が男子に比して高まって居ります、他の多くは男の方が女の方より余計死んでおります、それから発病から死亡に至ります実況を見ますと云うと、7日目に死んで居る所の「パーセント」が最も高いのであります、要するに先程申し上げました通り、3府24県の実数が900万有余名、<sup>したが</sup>随て日本全国に致しますと云うと、内地だけでも1,500~1,600万の患者を出して居ると云うことを推定し得るのであります、而して死者は之に対して十有余万人あったと云うことが推定し得るのであります、斯う云うような実に恐るべき実況でありまするが為に、政府に於きましては、昨年10月23日を以ちまして、当局大臣の命に依り、小官より致しまして、各地方長官にそれぞれ予防又撲滅に付きまする所の方法を、詳細にそれぞれ注意を致しました、是は最早新聞紙等に出て居りますから、別段詳しい事は申しませぬ、要は詰まり各自の予防行為自覚と云うものを促して、成べく人込の中は行かないようにするとか、外出の際帰宅の節には、簡単なる塩水位でも含嗽(=うがい)をするとか、或は口に覆う所の「レスピレーター」(=マスク)を懸けて出るようにするとか、殊に電車などの際に於ては、余程其点に注意すると云うような、幾多の注意方をするように<sup>つちよう</sup>通牒を發しました、是に依りまして<sup>はじ</sup>警視總監を首め各府県知事に於きましては、諭達を發布致しまして、其徹底を期しつつあるのであります、他面に於きましては所謂医薬給せざる所の者があつてはならぬという所から致しまして、済生会の活動を促し、此2月1日に至りまして、尚英照皇太后陛下(明治天皇の嫡母)の御崩御の際に賜りましたる各地方の慈恵救済資金、又御大札の際に御下賜ありましたる大札恩賜金、此内より適當の支出を致しまして、貧にして医薬給せず、其病気の為に死するようなことがありましては大変でありますから、其辺の徹底方も注意を致して居ります、で或は先程の御質問中に、どうも山根君の希望して居られるのは、政府当局はそれぞれ専門の学者を集めて、何等か防疫の機関でも設置してはどうであるか、其辺の考はないかと云うような御趣旨にも<sup>か</sup>拝承致しましたが、成程<sup>か</sup>管てペストなどに付きまして、臨時防疫期間を設置したこともあります、併しながら此病気の所謂病原菌に付きましては、私より専門家であらるる所の山根君は<sup>つと</sup>夙に御了承のことで、是は1,889年に西班牙(スペイン)に「パイフェルス」菌というものが見付かつて居った、元來此「パイフェルス」菌に付ては、山根君も御了承の通り、伝染病研究所は之を認めず、東京の医科大学に於ても或部分に於ては同様の意見を持って居るにも拘らず、他面に於ては北里研究所の如きは、此「パイフェルス菌」を80「パーセント」認めて居る、現に其調査研究の結果に基きまして、血清を作つて、今之を試験しつつあるような実況であります、又他面京都の医科大学、福岡の医科大学に於ては矢張同様に「パイフェルス」菌を認めて居ります、尚昨日葉山の御用邸に天機奉伺に参りました際に、汽車中で神奈川県<sup>まこと</sup>の当局に遇いましたが、神奈川県に於ては、内務より派遣して居りまする、北野防疫官が段々攻究致しましたる結果、所謂「パイフェルス」菌に基づく感作「ワクチン」を作つて、是が<sup>まこと</sup>寔に熱を出す所の反応を出さないで、余程予防に有効であると見受けられると云うような話も聴きました、併しまだ是は極一少部分に適用したのでありますから、是が予防に有効的確であるのみなら

ず、治療の上にも有効的確とは断定は出来ませぬが、今日部下の技術官が参って居りますから、其辺の調査に依りまして、或は面白い結果が出来はせぬかと思つて、非常に多大の望を持って居るのであります、実は此問題に付ては、夙に官立伝染病研究所にも相談を致し、又北里研究所の方面にも十分に懇談を遂げまして、或は集会を禁止すべきか、伝染病予防法を適用して、所謂主務大臣が伝染病と之を指定いたしまして、其病氣に対して一定の行為不行為を命ずるような手段を執ろうか、即ち集会禁止の如き不行為を強制すべきかと云うような点も随分攻究致しましたが、どうも是はまだ少しく攻究を要します、のみならず集会を禁止しましたならば、電車なども止めなければならぬ、結局此交通機関「トラフキック」と云うものの上に非常なる影響があります、のみならず凡そ斯様な伝染病の流行る時分には、其本病それ自身の外に、臆病と申しますか神経的に非常に恐怖致すような心理状態も起りますので、愈々此禁止を断行すると云うことは一 集会を禁止を断行する云うことは、余程調査を要し、考慮を加うべき余地があると云うような専門家の証言もありまするので、それこれ等を斟酌致して、まだ其方面にまで手は著けて居らぬのであります、併し昨日あたりの東京市に於ける実況などを見ても、事実去年の150人、160人の死亡者に対して、東京市内に於ける死者が300人以上に達して居りますから、大概に於て此流行感冒に依つて死する者は、150人づつあると云うことが分るのでありますから、山根君の仰しやる通り、実に警視庁は夜だけの火葬を以て足らずとして、遂に昼火葬することも許したような訳であります、寔に吾々同胞此民族の上に於て、衛生上遺憾千万の事と考えて居る次第であります、希くは何等かの方法を以て、此上とも当局は鋭意此方面に力を加えまして、此予防方法及此撲滅に付て、最善の努力を致す上に於て尚ほ考慮を加えたいと考えて居ります、此神聖なる議場に於て、吾々同胞民族に関する問題に付てご質問を蒙り、而して尚ほ是等に付きまして、斯学の専門家たる山根君より深甚の御注意を以て御希望を拝承することを得ましたるものは、吾々当局に取りまして深く感謝の意を表明するものであります、概要右にて御了承願います

伊東知也：



酒田出身  
中国・朝鮮問題  
で活躍

政府委員に質問があります、宜しうございますか—甚だ無躰な話でございますが、此程大岡議長と或る私の席上に於て、色々現在の此世界風の流行に付て御話をした際に於て、議長の仰せられるには、どうも不思議な現象がある、今回の此世界風なるものに罹る者は、多くは酒を飲まぬ人であつて、酒を飲む者は余り罹らぬと云う(笑声起る)それに付ては杉山衛生局長も其事を自分に御話になったことがある、是は余程面白い現象であるからして、どう云う統計になつて居るか知らぬが、自分もそれ以来酒量を増すようにして居ると云うことを、大岡議長が私直接御話になったのであります、又議院内に於ても御聴きなつた人もある筈であります、そうしますると是は実に余程面白い事でありまして、杉山局長を首めと

して、酒の効能は愈々此れに於て顕著なる証を見ると云うことになつて、敢えて「ワクチン」とか何とかむつかしい事を言わなくとも、酒を飲みさえすれば此風邪が免れることが出来るならば、大いに酒を飲むことを奨励なされたならば、此病原を防ぐことが出来やしないかと云う私は

考を持って居ったのであります、幸いにして本日此問題が此議席に現れましたから、飲酒者と酒を飲まぬ者との死亡率の統計に付て御調査があるや否や、又局長自身が大岡議長に向つて、或は漠然たる御話であつたか知らぬが、そう云うことを御話になつたとすれば、何ぞ<sup>よりどこ</sup>據<sup>ろ</sup>があつたに相違ないと私は思いまするが、願くば之を明らかに御説明下さいまして、酒を飲まぬ者には酒を飲まず、又非常なる勢を以て死亡率を増す所の風邪を防ぐ為には、余程是は簡便にして要を得たる方法だらうと思ひまするから、其点に付ての御考は如何でございましょうか、何か死亡率の統計か何か<sup>が</sup>其處に御有りになればご説明を願ひたいと思ひます

政府委員 杉山四五郎：

唯今伊東君より酒を飲んで居れば此病氣には罹らぬ、酒と此病氣との關係はどうであるかと云う御質問と存じまする、実は私は専門家でもありませぬものですから、<sup>そうそつ</sup>匆卒の際に斯る責任ある御質問に対して答弁を致しすることは、甚だ如何かと存じまするけれども、今まで聴及びましたる範圍に依りますと云うと、専門の医者<sup>は</sup>酒を飲んで居ると云うことは、此風邪に罹つた時分に熱などを<sup>じやつき</sup>惹起す際最も危険である(笑声起る)熱の解脱することが酒を飲まない人より飲んだ人の方が遅い、詰り酒を飲む人は<sup>い</sup>謂わば心臓が襲われて居るのでありますから、どうもすると此死亡に帰するやうな<sup>おそれ</sup>虞が酒を飲む人の方にある、故に風邪に罹つた時分に、なにそんなものは酒で押通して宜しいと云うやうな積りで、感冒に罹つて酒を飲んで居りますれば、どうもすれば非常に恐るべき転帰を取ると云うやうな事までは聞いて居りましたが、是れ以上統計等に依て云々の御質問には一寸其御答弁が出来かねます・・・

※ 現在の新型コロナウイルス感染より多くの感染者と死者が出、病原菌もはっきり特定できない様子が伝わってきます。

当時の政府は集会を禁止するのか、交通機関を止めるのか対策に苦慮している様子です。予防法は現在とそう変わらず、人込みを避け、うがい、マスクの着用を国民に通達しています。又、飲酒と感冒の關係性を問うのは、根本正の未成年者飲酒禁止法案が關係しているのか？ どんな意図があつたのか興味深いところです。

## 日米・日中友好と文化交流に生涯を捧げた一人の女性

根本正は28歳の時、アメリカに渡り勉強しました。1879年のことです。それから43年後の1922年に29歳でアメリカに渡り勉強し、日米・日中友好と文化交流に身を捧げたすごい女性がいました。その女性ことを書いた本が昨年10月に発刊されましたのでご紹介します。本の名称は『松岡朝物語』です。ここからは本の内容から引用して説明させていただきます。

『松岡朝物語』は、日米と日中友好、そして文化交流のために生涯走り続けた、松岡朝さんの物語です。朝さんは、社会法の分野で日本人女性として初めてアメリカの博士号を取得し、第二次世界大戦前日米友好のために尽くし、「日本ユニセフ協会」の立ち上げや「社団法人 海外と文化を交流する会」の設立などに貢献されました。本書は朝さんが英文で書いた原稿（倉庫に保管されていた）を養女の松岡裕子さん（キリスト教絵画家で根本正顕彰会会員の妻）が整理し、角山祥道氏によって物語に仕上げられた一冊です。

第二次世界大戦前、中国大陸に進出した日本に対するアメリカの感情は最悪の状態でした。その中で、朝さんは、日本文化を紹介し、日本を理解してもらうため、18か月の間に150回もの講演をアメリカ各地で行い（このことは、各地の新聞が大きく報道しました）、日米友好のために尽くしました。

当時、日本が中国大陸で行っていることは“憎しみの種”を蒔くことだけと、朝さんは、憂いました。憎しみではなく“友情の種”を蒔きたいと中国・上海に渡り、アメリカ留学をした中国人のサロン「アメリカ留学生クラブ」を、続いて子ども達の居場所「南京児童学園」を、孤児や浮浪者のための「施粥廠(せしゆくしょう)」を作り、日中友好にも尽くしました。

戦争が終わると日本は焦土と化しました。衣食にも事欠くこの時代に、朝さんは、「日本ユニセフ協会」の立ち上げに参加、さらに退任後「社団法人 海外と文化を交流する会」を立ち上げました。——「松岡朝物語の出版にあたって」より——

ところで、根本正と松岡朝さんとの関係は、朝さんのお父様（健一氏）と正が友人であり、朝さんと正は面識があったそうです。又、正の所有している浮世絵コレクションの鑑定を朝さんをお願いしたそうです。おそらくバーモント州のビリングス家へ正が贈った浮世絵も朝さんが鑑定された物と思われます。

さらに、正から朝さんへ言った「あなたは、将来、文化交流に携わる仕事をした方が良いですよ！」という言葉が朝さんの心に残っていたそうです。

明治・大正・昭和と激動の時代に、日米・日中友好と文化交流に生涯を捧げた一人の女性の本『松岡朝物語』を皆さんも読んでみては如何でしょうか！！

本の内容はYouTubeでも紹介されています。[本の旅] 524 編：松岡朝物語 (松岡 裕子)  
令和2年7月 根本正顕彰会 副会長 根本正治



## 佐竹北家

北家の先祖は佐竹15代義治の3男義信で、常州佐都西郡太田城の北に住したので、北を称するようになった。

17代義篤の幼少、叔父の北義信、東政義が補佐した。

三家筆頭格、代々宗家の烏帽子親となる。戦国期、外交官として三家の役割は極めて大きく、領地拡大の原動力となった。部垂の乱による内乱は起きておらず、宗家を頂点とする佐竹権力の一元化にも大きく寄与した。

1 義信—2 義住—3 義廉—4 義つな—5 義憲—6 義廉—7 義直—（北家絶家）

8 義隣（北叉四郎、河内義親、母は義宣の妹、公家高倉永慶の2男重丸、蘆名家断絶により1653年角館へ。小野崎氏は角館、根本氏は刈和野へ。

### 1 利員城

初代義信は利員に領地、山入乱後久米城へ。

城の来歴については今一つ明確でないが、美濃出身の河合備前守の居館とか、山入氏の川井氏の居館であった等の説がある。最後の城主、河合左大夫は文禄4年（1595）この地で200石をあてがわれている。

### 2 久米城【佐竹北家の拠点】

久米城は、山田川の東側の山地に展開する山城跡である。山尾小野崎筑前守が築城したとも山入氏が築城したともいわれているが定かでない。

城下には山麓の屋敷を示す「根古屋」をはじめ「上宿」「中宿」「下宿」などの小字が見られる。山城が非日常の空間であるのに対し、城下は日常の空間である。久米城跡は戦国期の城郭の姿をよく残している。また、太田城と久慈川沿いの部垂城とを結ぶ中間点に位置しており、戦国大名にとって要衝を押さえる重要な城郭である。

### 3 秋田時代（幕末）

江戸幕末以降相馬氏一門より3度に亘る養子によって北家は続く

18代義尚、男爵、従五位。21代敬久氏、現秋田県知事。

## 4 角館（佐竹北家 1万石）

古城山（角館城址）中世に戸沢盛安が築城、これを軸に町割が行われてきた。芦名家は1589年【天正17】、奥州の覇権を目指す伊達政宗に負け養子の佐竹盛重【芦名義広のちの義勝】は、会津譜代の家臣と共に常陸に逃れて家の再興を図った。1590年【天正18】豊臣秀吉の小田原征伐に参加した芦名家は再興が認められ、常陸国江戸崎に4,8千石の領地が与えられた。関が原の戦いの後、佐竹氏と共に秋田へ転封され、角館の領主として再出発した。しかし盛俊が死に嫡子の千鶴丸が1歳で後を継ぐが、3歳の仏参の折り、天寧寺の縁側から沓脱ぎ石の上に転落して夭逝。全くの予期せぬ不運が続き、芦名家は1653年（承応2）断絶した。後の北家8代佐竹義隣が角館所領。

## 5 秋田、山北大名領

秋田（安東）実季—出羽秋田三郡、湊城、19万石、宍戸へ。後に三春へ  
戸沢正盛—角館、4万石、平忠正の孫衝盛。岩手県雫石町祖。松岡、小川、高萩手綱へ。後に家康命により新庄へ転封。

小野寺義道—横手、3万石、藤原秀郷流、下野小野寺保（岩舟町）を本領とし、御家人小野寺道綱が雄勝郡地頭職となり、関が原、藤原系上杉景勝側、家康から改易となり石見国津和野に配流となる。

六郷政乗—仙北（六郷）、5千石、石岡府中へ。

本堂義親—和賀氏一族で本堂城主、仙北（千畑町）最上氏方、9千石、志筑〔千代田村〕へ。

## 6 秋田転封時所領

54万5800石から20万5000石。1664年

久保田城下	東家	5000石	東義賢
角館	芦名家	4千石	芦名平四郎盛重
大館	西家	小場氏	1万3000石
湯沢	南家	南左衛門義種	7800石
横手	伊達盛重～須田盛秀～戸村義連		
十二所	塩谷氏		
檜山（能代）	多賀谷氏		
院内〔雄勝〕	矢田野安房守義正	常陸佐竹研究会	海老根敬



## 大相撲の奥深さ 伝わった春場所

▲無観客での開催、1人でも感染者が出たら中止という背水の陣で臨んだ大相撲春場所千秋楽。横綱決戦の

後のセレモニーに感動した。八角理事長のあいさつには万感の思いがこもっていた。「千秋楽に当たり」の後の言葉が出ない。その時の表情、姿勢から、脳裏に去来しているであろうものの大きさを推測するだけで、私の心もしびれてしまった。

▲かみしめるように発する一言一句は言霊である。「世の中の平安を祈願」「立派に勤め上げてくれた全力士、全協会員を誇りに思う」は、初日の「力士の四股は邪悪なものを土の中に押し込む」などと相まって、大相撲の奥深さ、素晴らしさを教えてくれた。

▲全ての関係者の真剣な取り組み、本気度が伝わってきた。出世力士手打ち式、神送りの儀式まで見られたこともありがたい。感動、希望を、世の中の平安を呼び戻すために生かしたい。  
(那珂市 無職 小堀優 71歳)

(2020.4.6)

## 「大相撲の奥深さ 伝わった春場所」に関して

本会理事 小堀 優

### 1 なぜ、この会報にこの小文か

前ページ「大相撲の奥深さ 伝わった春場所」は、茨城新聞「県民の声」に掲載された私の投稿である。由緒ある本会の会報誌に、根本正とは直接関係ないこの小文を、なぜ載せるのかについて言い訳をさせていただく。

ある縁で、昨年度から本会の理事になってしまった。最初の理事会に出てびっくりした。増子会長と3名の副会長を入れて8名の少数で、私を除いては根本正に造詣深い精鋭の会なのだ。常にドキドキしている。そんな私を、みんなが温かく包んでくれる。会長は、私がたまに投稿する拙文を見逃さずに励ましてくださる。4月の理事会には今回の投稿文のコピーを用意してくださった。恥ずかしくもうれしかった。

コロナ禍で行事等ができなかったため、会報紙面に余裕ができた。6月の理事会で、「小堀さんのあの投稿文も載せたら」との提案が仲田事務局長から出された。「本会の裾野を広げるためには、一人くらい根本正についての理解の浅い理事がいてもいいのではないか」と聞き直りつつあった私は、図々しくも引き受けることにした。

### 2 私にこの投稿を書かせたもう一つの理由～あるご縁

もちろん、千秋楽セレモニーへの感動が、私の心に火を点けペンを執らせたのである。それは、拙い投稿文に表現した通りだ。

ただ、この感動には、私なりの種火があった。私の人生の師であるN先生から、八角理事長の母に関するある秘話を聴いていたことだ。大正時代、北海道広尾町に入植した貧しい開拓農家の9人兄弟の4番目に生まれたN先生の苦勞と感動の話に、私はいつも大きな感銘を受ける。残念ながら、ここでは触れられない。厳しい環境の下、小さな小中学校で9年間苦樂を共にした39名の絆は固い。80を過ぎても同窓会がある。理事長の母親もその一員だ。「息子は中卒だから理事長になってかわいそうだ」と泣くのだそうだ。N先生は、自分の父母の愛と重ね「親ってありがたいですね」と語る。私も、今は亡き両親を思い心が震えた。

千秋楽の協会あいさつで理事長が言葉につまった時、その胸中を思い、私も感極まった。と同時に、テレビの前で見ているであろう理事長の母親のことが頭をよぎった。

私の投稿文が日の目を見た時、N先生に手紙を書いた。

……千秋楽での八角理事長の立ち居振る舞い、ごあいさつに深い感動を覚えました。(中略)先生から聴いていた「八角理事長の母親の子を思う心」を思い浮かべながら文章を綴ったのでした。400字という制限がなければ、そのことも書きたかったのです。中卒でも、相撲界という中等教育・高等教育に真摯に学び、横綱、親方、理事長という大役・大任を通して、人間力を磨き上げたすばらしい大人たいじんの姿に、教育の大切さ、自己研鑽のすばらしさを教えられました。(以下略)

N先生は、早速、私の投稿のコピーを送ってくださったそうだ。後日、母親からN先生の所に電話があり、「書いた人はNさんの後輩なの。あれを読んで、また、あの時のことを思い出して涙が止まらなくなった」とのことだった。私の感動もよみがえった。

今回の投稿に関して、私は二重三重に心を揺さぶられた。有り難い。(令和2年7月7日)

私が歴史に興味を示したのは義務教育の終了する前後と思います。常陸太田市の生まれで、佐竹氏・徳川氏の史跡を当時の仲間と訪ね歩いたのが始まりでした。

昨年、仲田事務局長の紹介で、根本正顕彰会に入会して様々な思いの中、スタート地点に立たせて頂きました。会員の皆様、また理事の皆様方の広く・深いご見識にひたすら感激と刺激の一年でした。同時に私自身の勉強不足と知識不足を痛感し身の置き所を見失っている状況でもあります。

会員の中には他の歴史講座等で学びあった方や、約55年前の中学生時代に教えをうけました恩師にこの顕彰会を通じてお会い出来ましたことに深い感銘をうけました。

今後もこの顕彰会の歴史と重みを感じつつ多様な視点で学び有識者先輩のご指導を頂きながら意欲を高めてゆきたいと考えております。

## 「疫病退散の祈り」

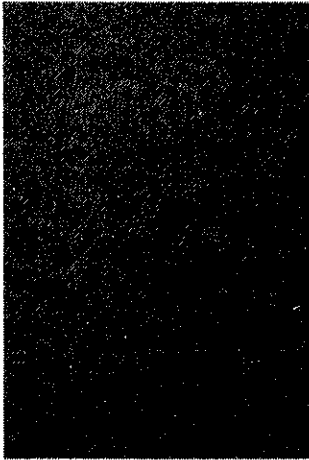
仲田昭一

令和2年3月、疫病新型コロナウイルスの出現により、私たちの生活様式が大きく変わることを余儀なくされています。疫病は、私たち人類が生きるために自然界を開墾したことにより、今まであった生体系が崩されたことに始まります。それまで自然の中で平穩に時を重ねていた生物たちが突然変異を起こし暴れだしたからだといわれています。

元々は、地域に限定されて流行った風土病でしたが、文化文明の発達により、世界中が繋がることによって大流行することとなりました。人類はこれまでも様々な疫病を鎮めてきました。日本で流行った代表的な疫病を挙げてみますと、痘瘡(天然痘)・麻疹(はしか)・赤痢・コレラ・インフルエンザ・癩・結核・梅毒、そして現在のコロナウイルスなどがあります。それでも人類がなくなることがなかったのは、医学者と人々の努力の賜物だと思います。

研究者としては、「日本の細菌学の父」北里柴三郎はペスト菌を発見し、破傷風の治療法を開発しました。また、志賀潔は赤痢菌の発見者として知られています。現千円札の顔でもおなじみの野口英世は、黄熱病や梅毒の研究で知られ、ノーベル生理学・医学賞候補に三度名前が挙がりました。私たち一人一人は、罹(かか)らない、うつさないことで、流行の終息を待つしかありません。

### 牛頭天王



(加藤寛齋筆瓜連素鷲神社  
の牛頭天王面)

疫病の流行は古代からありましたが、日本では、「医学」による研究がなかった時代、抵抗のできない自然の驚異を牛頭天王はじめ八百万の神々に祈って鎮めるという信仰がありました。平安時代には貴族たちの権力争いの中で蔓延する疫病に恐れて、その解決に陰陽師の祈祷が重んじられました。牛頭天王はインド祇園に鎮座する除災の神とされ、朝鮮半島に渡った後に日本の京都八坂の祇園に移ってきたといわれます。その時に、日本の出雲国清野の地に住む除災の神である素戔嗚尊すさのおのみことと同一視され、また仏教では薬師如来とされました。日本の中世における神仏習合信仰の結果です。牛頭天王は、明治維新前後からは素鷲神社や須賀神社、八坂神社と改称されました。

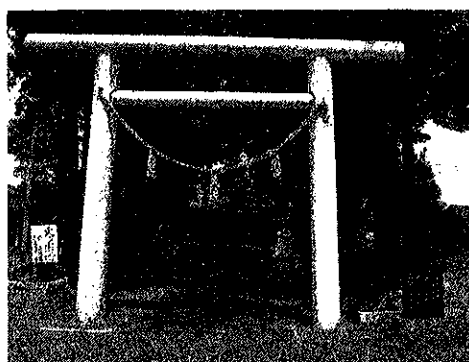
この他の疫病退散祈願は、稲敷市の「あんばさま」呼ばれる大杉神社や旧友部町(笠間市)の小原神社が知られています。そのために、県内各地に牛頭天王社・八坂神社・素鷲神社・須賀神社および大杉神社や小原神社が大小の社殿、祠とし

て祀られています。

なお、神社は明治維新後の神仏分離政策や明治39年(1906)の神社合祀令による整理により、小社や小祠が一村一社の摂社・末社など境内社としてまとめられました。そのために、独立した素鷲神社・八坂神社は多くはありませんが、境内社としては各地の鎮守の境内に祀られている姿を見出すことができます。

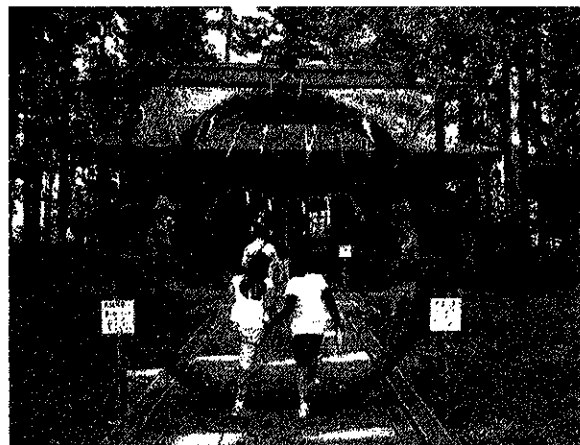


水戸市の「天王町」は、現在は天王社は存在しないが、かつては「お天王さん」と親しまれた牛頭天王社（旧友部町小原の小原神社）のあった跡であることを示しています。この牛頭天王社の元は、水戸城内二の丸曲輪（水戸三高・茨城大学附属小学校敷地）に江戸氏が牛頭天王を祀っていたことに始まり、そこは「天王曲輪」と呼ばれていました。それが、佐竹氏時代に木町（金町）に移り、さらに水戸徳川氏時代には備前町近くに移転したものです。それが、9代藩主斉昭によって那珂川沿いの上河内村に移転し、村の鎮守鹿島神社を改め素鷲神社と称され現在に至っています。



(水戸市上河内:素鷲神社)

### 「茅の輪くぐり」の神事



(那珂市鴻巣:鷲神社の「茅の輪くぐり」)

また、6月30日の大祓会には「茅の輪くぐり」の神事が行われます。これは、茅の輪をくぐり越えて罪穢れつみけがを除き、疫病などにかからないようにと心身の清浄を祈請するものです。茅は延命長寿の草ともされています。

茅の輪の起源については、『日本書紀』や『備後風土記』に出ています。それによると、神代の昔、素盞鳴命すさのおのみことが南方に向った途中、土民の蘇民将来そみんしょうらい・巨旦将来こたんしょうらいの兄弟に

一夜の宿を求めた。裕福であった弟の巨旦将来はこれを拒み、貧しかった兄の蘇民将来は命をお泊めした。粟殻をもって座を設け、粟飯をもつてもてなした。その後しばらくして命は再び蘇民将来の家を訪ね、「もし天下に悪疫が流行した際には、茅をもって輪を作り、これを腰に着けておれば免れるであろう」と教えられたのである。

この故事に基づき、「蘇民将来」と書いて門口に貼れば災厄を免れるという信仰が生

じ、また祓いの神事に茅の輪を作ってこれをくぐり抜けるようになったものです。また、「夏越し」・「なごし」は「和ごし」、「和儺」で人の心を和やかにするのであるとの説もあります(鷲神社神官、鷲尾瑞穂記)。

なお、大杉神社は倭大物主櫛鬘玉命やまとおおもものぬしくしむかたまのみこと(少彦名命と同じ、三輪山に住み、スサノオノミコトの子大國主命おおくにぬしのみこと即ちオオナムチノミコトとともに国造りの協力神、酒造り、医薬品造りに貢献した。三輪山の古来の杉に宿るところから大杉の名称が生まれたともされる「大杉神社」や酒屋の軒先に吊す「杉玉」に関連する)、稲敷市阿波に鎮座する大杉神社は「あんばさまとも呼ばれて親しまれている。ここの拳けんぞく属は「鼻高天狗」「烏天狗」です。大型の天狗面が祀られています。

また、小原神社の祭神も少彦名です。スサノオノミコトの子でオオナムチノミコト・大國主と共に国造りの協力神であり、医薬や温泉、まじない、穀物・酒造の神とされ、国土安穩をもたらす神として祀られ、信仰されてきました。

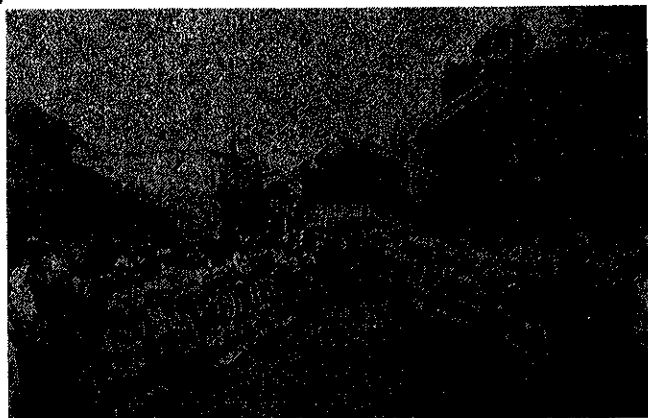
※ 日本で最初に「コレラ」が発生したのは江戸時代の文政5年(1822)、西日本に流行した病名は不明であった。1884年(明治17)にドイツ人医師ロベルト・コッホによってコレラ菌が発見された。その後オランダの商人から「コレラ」の病名を伝えられた。

## 祇園祭

素鷲神社や八坂神社では強力な疫病退散の神としてスサノオノミコトを御祭神としています。スサノオノミコトはかつては暴れ者で田畑を荒らし、機織り工場の屋根を壊したり、動物を殺し、人々の迷惑をかけてことから高天原から追放されますが、風雨の激しい中を辛苦して出雲の簸ひの川上に到達し、そこで奇稲田姫くしいなだひめを八岐大蛇の迫害から救い出し、その後出雲の清地いなげに移り奇稲田姫と結婚します。生まれたのが大國主命で神話「因幡の白うさぎ」の主人公になります。その後は勇気と優しさを持った優れたミコトとなって自然の災害や疫病を退散させ、人々の生活の安泰をはかったとされています。祇園に鎮座した牛頭天王と同一視もされて(薬師如来とも習合)牛頭天王社、素鷲神社、八坂神社などに祀られます。その祭事が祇園社で、その地域を鎮めるために御祭神が神輿に乗って出社し、地域を清め安泰を図る行事が祇園祭です。それに賑やかさ華やかさを加えるのが山車や屋台・鉾などが繰り出されたのでした。



(常陸大宮市山方の素鷲神社)



(昭和30年、旧山方町の祇園祭)



### 【編集後記】

会報「第94号」を会員皆様へお届けできることを嬉しく思います。

令和2年度の当顕彰会の事業は、新型コロナウイルスの影響でことごとく中止になっています。本来は総会・講演会、第1回公開講座等の内容を本会報で紹介する予定でしたがそれが出来ません。そのような中で、役員からの投稿と言う形で会報を編集しました。会員皆様からの投稿も時間的制約でありませんでした。申し訳ありません。

今後の事業は、顕彰フェスティバルを8月29日から11月21日(土曜日)に延期しました。9月27日に計画しました『ゆかりの地を訪ねる旅(大子町・埴町方面)』は、まだまだ新型コロナウイルスの感染拡大が懸念されるため残念ですが中止としました。それ以降年度後半の事業も実施できるかどうか現在のところ判断できません。会員の皆様への連絡は、那珂市広報やハガキ等で実施していきたいと思えます。

新型コロナウイルスは3つの密を避けることが大切です。顕彰会は会員相互の連絡を密に進めたいと思えます。今後ともよろしくお願ひいたします。

### 【新しい生活様式】

(根本 正治記)

